基礎ゼミナール

システムデザイン学部インダストリアルアートコース・教授
笠原　信一

はじめに

「基礎ゼミナール」は、能動的学習姿勢への転換、課題解決に必要な技法の体験的習得、豊かな人間関係の形成、などを目標にして、入学直後の1年次前期に、少人数の受講生（最大24人）でゼミ形式で行う授業である。この科目は必修科目に設定されており、今年度は、受講学生1731名に対して79のクラスを開講した。以下に、FD委員会と教務委員会基礎教育部会で実施した「20年度基礎ゼミナールの授業評価アンケート」の結果について、概要を紹介する。

調査対象と回収率

受講学生と担当教員の両者を調査対象とした。学生による授業評価をSE、教員による授業評価をTE、と呼ぶ。SEは、履修登録学生1731名に対して1451名からの回答があり、回収率は83.8％であった。TEは、授業担当教員79名に対して67名からの回答があり、回収率は84.8％であった。教員の回収率が学生の回収率よりも下回っているのは問題である。少なくとも今後、教員の回収は100％に近づけていく必要がある。

質問項目

合計で12の質問項目を設定した。このうち第1問から第8問までは、都市プログラムや実践英語など他の教養科目と同じ設問で、第9問から第12問までは、基礎ゼミナール独自に設定した設問である。SEとTEは第9問以外は同一の質問項目である。

独自設定の設問では、基礎ゼミナールの特徴である、問題解決能力とプレゼンテーション能力についての設問を設定した。また第12問は今年度改良し、教員の解説部分と学生どおしの議論の部分のバランスが悪い場合にどちらが多いと感じたかを記入できるようにした（前年度まではバランスが良いか悪いかだけを答える設問であった）。

以下に、各質問項目を示す。［ ］で囲んだ末尾の単語は質問項目の略称である。

問 1　私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。［態度］
問 2　授業の目的を意識しながら学習することができた。［意識］
問 3　教員の説明はわかりやすかった。［説明］
問 4　教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。［対応］
問 5　授業時間外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？［時間］
問 6　成績評価方法について十分な説明があった。［成績］
問 7　シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。［成果］
問 8　私はこの授業を受講して満足した。［満足］
問 9　SE　シラバスの内容は自分の興味に沿っていた。
　　TE　さまざまな所属の学生が興味をもつテーマを設定した。［主題設定］
問10　問題発見と、その解決に向けた取り組み姿勢の重要性を認識した。［問題発見］
問11　ディスカッションやプレゼンテーションなどの自己表現能力を向上させることができた。［表現能力］
問12　教員によるテーマの解説部分に対して、受講生による議論・調査・発表の部分の時間のバランスはどうでしたか？［バランス］

回答結果についての考察

まず一番注目したいのは学生の満足度であろう。学生の[満足］の回答の5（強くそう思う）と4（そう思う）の合計（以下、「高評価」と呼ぶ）は、75.7％に達しており、高い水準にある。昨年度（19年度）の同じ指標は66.7％であり、昨年度よりも大きく改善されている。また昨年度の値は、一昨年度よりも改善されているとの報告が昨年度のFDレポートに記載されており、毎年、学生の満足度が上昇しているが分かる。これは基礎ゼミナールが新しい授業形式の試みとして始まり、試行錯誤を重ねながら次第に充実し、定着してきたことを表すものであろう。担当教員のご努力に感謝する。またその裏返しとして、［態度］（授業に意欲的・積極的に取り組んだ）が、高い値を示していることにも注目したい（高評価が81.1％）。

そのほかで学生からの評価が高かった項目は［対応］（教員は学生の質問に適切に対応した）で、高評価が

85.2％であった。教員の積極的な取り組みが学生に評価されている。

一方、学生からの評価が低かった項目は［成果］（目標の知識や能力を獲得できた）と［成績］（成績評価方法について十分な説明があった）で、高評価がそれぞれ44.6％と36.6％であった。基礎ゼミナールの目的は、知識の習得ではなく、グループによる問題解決のプロセスを実体験することにあるので、成果がはっきり認識できない面が影響しているように思われる。成績評価方法の説明が不十分であると学生が感じている点については、今年度の反省とし、教員への周知事項として次年度に引き継ぐ。ちなみに、教員による評価は［成果］と［成績］ともに高く、それぞれ67.2％、74.6％となっている。学生と教員がこれだけ認識に差があるのは問題である。

同じ項目について学生の評価と教員の評価を比較すると、全体的に教員のほうが高い（甘い）評価になっている。その中で［満足］の項目だけが逆転しており、教員の満足度（59.7％）は学生の満足度（75.7％）よりかなり低い。教員は他の項目では全般的に高い点数をつけているのにも関わらず、満足度だけが低いのはどう解釈すればよいのだろうか。

今年度から新しく［バランス］（ 教員の解説と受講生の議論の時間バランス）の質問を設定した。これを見ると、学生のほとんどすべて（91.7％）が「ちょうど良かった」と答えており、本来の基礎ゼミナールの目標に沿った授業形式が展開されているといえるだろう。これに対して教員の回答は、「ちょうど良かった」は67.2％で、23.9％は「教員の解説が少なかった」と答えている。教員はどうしても話をしたがる傾向にある。限られた時間内で学生の議論を促すよう、自戒をこめてこの教員と学生の認識の差を心に留めておく必要がある。

自由記述についての考察

自由記述の欄への記述が、学生から延べ604件、教員から延べ87件あった。アンケート回収は、学生が1451名、教員が67名であるので、かなりの高い比率（学生42％、教員77％）で意見を書かれていることからも、この授業に対する意欲や積極性がうかがえる。

今、これらの意見を分類して評価する時間は無いが、今後の改善の方向を示唆するものが含まれているので精査していきたい。学生の自由意見の設問は、「改めてほしい点」、「良かった点」、「その他」に分かれている。回答数は、「改めてほしい点」224件、「良かった点」255件、「その他」125件であった。「改めてほしい点」の記述には、授業の内容に関するものと授業の進め方に関するものがあった。

終わりに

アンケートの集計結果を見回してみて、全体的には基礎ゼミナールは当初の目標に沿ってうまく機能しているような印象を持った。しかし一方で、自由記述には様々な要望や不満が記載されている。今後時間をかけて内容を分析し、次年度の改善につながるものについては、基礎ゼミナールの担当教員に周知を図りたい。